

住吉っさん



反其道而行之



去岁年

録陶淵明 佳吉大社宮司道弘



夏雲多奇峰

陶淵明『四時詩』

かうんきほうおお
夏雲奇峰多し

夏の空の入道雲は高くそびえ、あたかも奇妙な形状の峰々が並びたつ様な形状を成している。

梅雨明けの強烈な太陽の日差し、生駒山を背景に、紺碧の空に真白な入道雲が湧き上り、生々化育、自然界の生きとし生ける物すべてを育む逞しい夏が始まる。コロナ禍と云う梅雨が明け、社会全体が健全な姿に復活し、元のマスキの無い普通の生活に立ち返る事を切に祈って止みません。

住吉大社宮司 高井道弘



当社はご崇敬の皆さまが安心してご参拝していただけるよう、感染症対策を充分に留意した上、祭祀の厳修に努めてまいります。祭祀や祈祷においても、環境整備を模索してまいりますので、なにとぞご理解ご協力のほどお願い申し上げます。

住吉神像など3件が新たな文化財に指定



木造男神坐像「古代神像」1
平安時代後期



木造男神坐像「古代神像」2
鎌倉時代(13世紀)



木造男神坐像「古代神像」3
鎌倉時代(13世紀)

住吉大社所蔵の木造男神坐像（3
軀）、住吉神画像群（一括8点・附2点）、
大阪画壇奉納扁額（一括55面）が新た
に大阪市指定有形文化財になりました
（令和4年5月27日付）。

1 神庫に秘蔵されてきた「古代神像」

一木造の彫刻による束帯姿の坐像です。長い年月により欠失や摩滅した箇所も多く見られますが、拱手（胸前で手を組むこと）した袖上に穴が穿たれ、正笏（笏は失われる）の姿勢であつたようです。詳しい来歴は不明ですが、制作年代としては、3体中の1体は平安時代後期、ほか2体も鎌倉時代にさかのぼるものと考えられ、貴重な神像であることが判明しました。大阪市域では中世以前の神像は珍しく、全国的にも鎌倉以前の作例が少なく、住吉信仰を考える上でも重要な存在です。

2 住吉明神を描いた「住吉神画像群」

当社所蔵の絵画神像として現存最古のものが、住吉神主の津守家に伝来した細川勝元筆の住吉神影で、対になる住吉神号の証判には

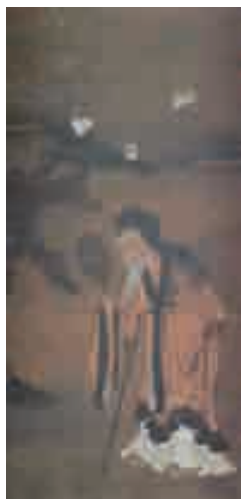
康正2年（1456）の年紀があります。住吉明神は、頭巾・袍・沓を身につけて団扇と杖を手にもった老翁姿で、左手には松を、その樹上には白鷺が描かれています。

さらに、伝狩野元信筆の画像（明治時代の書籍・松井正介の奉納）、江戸後期に奉納の同画像、住吉千度講に由来する画像2点、明治期の画家・上田耕冲筆の画像、明治期再興の初代住吉絵所預・藤原金穂（福井月斎）の画像の計8点を一括で指定されました。また、安田善次郎が奉納した黄金の彫像（香川勝廣作）なども附指定です。

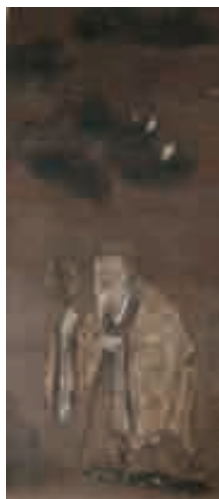
3 近代画家による「大阪画壇奉納扁額」

住吉に関する文物を描いた画像群で、全55枚の板絵の扁額を一括で指定されました。近代大阪画壇の画家における住吉信仰がうかがえる重要な絵画でもあります。

作者は、上田耕冲、庭山耕園、木村関泉、上田耕甫、



住吉神画像1
細川勝元筆
室町時代（15世紀）

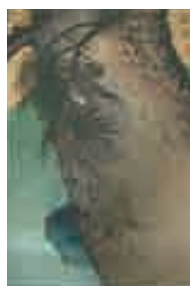


住吉神画像2
伝狩野元信筆

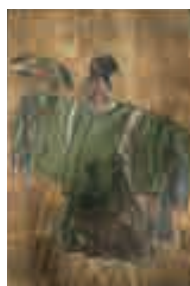
深田直城、平井直水、湯川松堂、歌川国峰、渡辺祥益、若林松溪、島田暉山、中川魚梁、吉宗耕英、上田幸雨、喜多暉月、香山翠山、松波長年ほかの署名があり、また、背面の墨書には、銘記の無いものを除き、大半には明治32年（1899）10月25日の年紀が確認できます。



大阪画壇奉納扁額 55面中
上田耕冲筆「竹に白鷺」



大阪画壇奉納扁額 55面中
庭山耕園筆「松」



大阪画壇奉納扁額 55面中
香西翠山筆「翁」



大阪画壇奉納扁額 55面中
若林松溪筆「住吉踊」



大阪画壇奉納扁額 55面中
藤原金穂筆「岩船」

筆頭者の上田耕冲（1819～1911）は近代の大阪画壇における中心人物のひとつで、父上田耕夫（丸山応挙門）と長山孔寅（呉春門）に学び、四条派の絵師として活躍、明治17年（1884）設立の浪華画学校では後身を育成、門弟も多く一門をなした人物です。歿後には子息の耕甫の願い出によって、ゆかりある住吉大社の招魂社に靈魂が合祀されています。

寄稿

散るぬる「俄」にわか

藤田 富美恵



竹馬酒樽のイラスト

俄は、江戸時代中期の享保年間（一七一六～一七三六）に、大阪の夏祭りの折に始まったと伝わる路上での即興劇です。

現在、大阪の夏祭りは七月一日の愛染祭に始まって、七月末の住吉祭で終わりますが、享保始めの頃も同様で、一連の夏祭りは六月晦日（旧暦）の住吉祭でお終いです。

名残り惜しさも相まって、町中が浮き立っている賑わいの中、ひとりの男の人が住吉祭で子どものお土産に買った馬の飾りの付いた竹馬に、空になった小さな酒樽を結び付けて、

へちようさや、ちようさや、千歳楽万歳楽

……

と囃しながら歩き出しました。

「ほら見てみ、あの男。なんや面白いこと、やってるな」

「ほんまや。あの酒樽、提灯のつもりらしいで」

江戸時代後期の安永四（一七七五）年に出た著者未詳の大坂俄の案内書『古今俄選』にも、

享保頃をひ。住吉まつりの参詣群をなせる中。其かへるさ飲尽したる酒樽を竹馬の先にくくりつけ。てうちんの如しめいめいもちそへて。たかくさしあげ……

と描写されているこのシーン。すれ違いざまに素早く滑稽な仕草を見せる楽しい姿は、大阪という「いちびり」や「茶利」の類です。ウケけると男は嬉しくて、

其人かへりしより。ぞんの外人のおかしがりたるを。みずからよろこびて。翌年は。はや。おに。おふくのめんなどを。たもとにして……

『古今俄選』

「よし、来年はもっと面白いことを」と算段し、見る側も期待します。

そのうちに、「所望 しよう」とお願いの声が掛かかるとその家に入り、お神楽などの物真似をして笑わせたりするようになります。つまり俄はお互いに、夏祭のもう一つの楽しみでもあったようです。

やがて気の合う人と組んで二人俄となり、次第に仲間も増えて江戸時代終わり頃には、数人が同じ衣装で芝居らしきことも始めます。そうなるも夏祭りだけでは物足らず一座を組み職業として、神社境内や寺の仮小屋で俄を演じるようになりました。

「俄」という名称には色々な字が当てられています。

所望されるとその家の庭に入り演じたので「庭神楽」と呼ばれていたのが縮まって「にわか」。

「二羽嘉」は、大坂の堺に頓智の名人で今曾呂利と呼ばれている「二羽屋嘉平治」の名前からです。

また、大坂東横堀の染物屋・豊島屋利八が仕事で京都へ出向いた折に遊んでいた遊郭の屋号が「輪違家」であることから、提灯に二つの輪がからんでいる絵の下に二〇加と書いて、京都

の祇園祭りの折に道化面で顔を隠して流し歩いたことによる「二〇加」。

その他「ニワカ」「仁輪加」「仁和加」など表記が沢山あるのは、俄が最初から形の整った娯楽ではなく、あちこちの夏祭りの場で盛んになるに連れて、それぞれ趣向をこらした元祖や家元が、自分流の字を当てたからです。

こうして当初小さな笑いだった俄は、明治中頃には「聴くものは義太夫、観るものは俄」といわれるほど代表的庶民娯楽にまで昇り詰めたあと、他の娯楽に押されて次第に衰退。通称「一人俄」は落語、「二人俄」が漫才、「芝居俄」も喜劇全般として発展していきました。

ということで、〈滑稽な〉〈可笑しい〉ことの代名詞にもなり、現代大阪の落語・漫才・喜劇の源流ともなる娯楽だった大坂の俄も、今ではすっかり忘れ去られてしまいました。



藤田 富美恵（ふじた ふみえ）
1938（昭和13）年大阪府生まれ。童話作家。
秋田實・長女。
帝塚山学院短期大学文芸専攻科卒業。
朝日カルチャー・心齋橋大学講師。
著書『秋田實・笑いの変遷』中央公論新社
『おっと千両イチゴちゃん』偕成社
『あの子は気になる転校生』PHP研究所

甦れ！

住吉街道の賑わいの立役者

「唐辛子

鷹の爪」
たか つめ

元大阪府立食とみどりの総合技術センター 主任研究員 農学博士

なにわ伝統野菜応援団員

森下 正博

明治35年創業、七味唐がらしなどを販売している(株)やまつ辻田 辻田浩之氏から令和4年1月18日に1本の電話が入った。「令和3年7月28日に、なにわの伝統野菜認証となった『堺鷹の爪』の証明書を作成してください」が、住吉街道の賑わいの立役者であったトウガラシ夢物語の始まりです。

1. トウガラシの渡来・伝搬と利用

トウガラシは16世紀に種子島に鉄砲と一緒に伝わったとされますが、諸説あり、大阪になじみの太閤秀吉が朝鮮より持ち帰ったとも。堺に2年ほど滞在していたことのあるポルトガル宣教師ルイス・フロイトは、見聞録『日本史』に、日本に普及活動に来る宣教師には「日本の貴人への挨拶に際しては、酢漬けのトウガラシを持参するように」との手紙を本国の教会に送っている。また、同様1587年加津佐でまとめた『日欧文化比較』において「麺類の薬味に唐辛をつかう」とトウガラシの利用について初めて記述しており、その後、200年ほどで急速にトウガラシは全国に伝搬し、和食とのマッチングで料理の名脇役になっています。

2. 大阪、住吉大社とトウガラシの関わり

徳川吉宗が本草学者の丹羽正伯に命じ編纂させた





図1・2. 住吉街道筋安立町の土産物屋で瓢箪、糸瓜、根引きトウガラシ、種などが売られている様子（巻の4,8）
（紀州藩参勤交代行列図巻 堺市博物館所蔵、提供）

1735年の『諸国産物帳』によると、北は陸奥の国から南は対馬まで全国的にトウガラシの栽培は広がり、同名異種・異種同名を含め164にも上る品種名が列記され、陸奥国南部領には11種のトウガラシ中に、初めて「たかのつめ（稀）」との品種名が、また、和泉国岸和田領には「とうがらし」として物産記録されていました。そして、寛政8年（1796）の『摂津名所図会』には、「新家町 この所の名物は金魚・酢蛤・ごろごろ煎餅・蕃椒・昆布・竹馬・糸細工・麦藁細工などなり」、同様1813年の『五畿内産物図会』にも「安立町産 糸瓜、瓢箪、根引とうがらし」などの名前と図また、短歌には「ほうつきと赤をくらへん蕃椒おなし根引になつてみせらん 泉州綱丸」と根引きトウガラシと根引きしたホウズキの果実の赤さを比べる様子が歌われており、近畿五畿内の中でも住吉街道筋の安立町産のトウガラシが特に名を馳せていたといえます。

さらに、住吉大杜所蔵の天保5年（1834）の『住吉詣狂歌』（第24丁オ）には、

「蕃椒家毎にひさく」と題して

世わたりを 凌きかねたる 諸家は

からくもひさく とうがらしみせ

広折

住吉へ 詣る人へ 蕃椒の

あかき心を みするなりはひ

範高

みすはるに 砕きてひさく 鷹の爪

かけてくふへき 唐からしか

栗三

珊瑚珠の 枝かと思らん 家なみなる

ことそしらすや ひさく蕃椒

京 三ツナ呂

世渡りの からきしれどや とうがらし

ひさける朝の からくかわらん

伊勢 萩の屋

3. 参勤交代行列図巻に 見える住吉街道の 「根引きとうがらし」

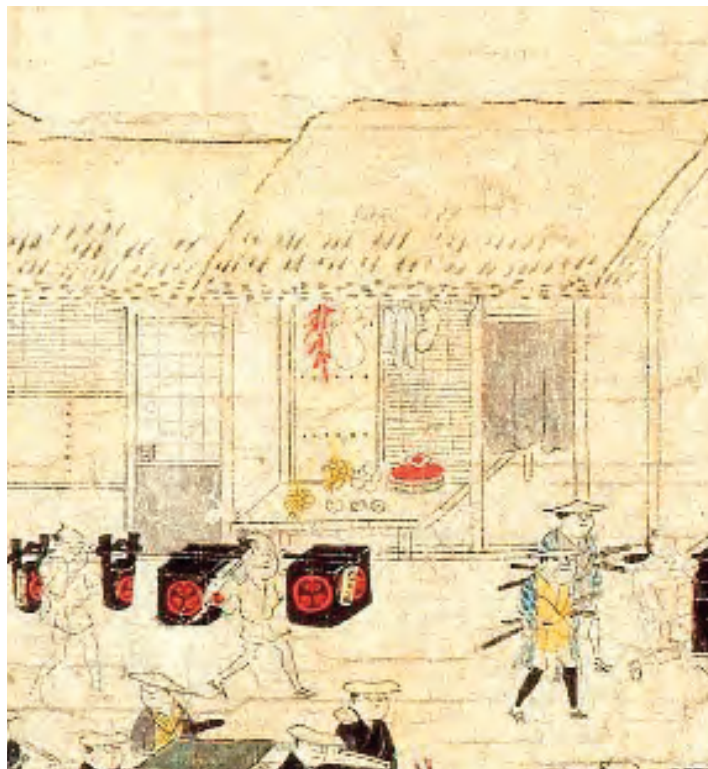


図2

江戸時代後期（1813年以降と森下推定）の『紀州藩参勤交代行列図巻』には粉浜、住吉大社から安立町にかけての住吉街道筋を、雅でハレな参勤交代の行列が静々と進んでおり、また、行列の後ろ側には門前町にある土産物屋の日常が描かれています。詳細にみると、ある店では五畿内産物図絵（安立町産）に描かれていた糸巻き筆、みすや針が売られ、また、別の店では軒下に根引きとうがらしの束、瓢箪、糸瓜が吊り下げられ、台の上には赤いとうがらしの実が盛られた笹が並べられている様子（図1・2）が描かれています。前述の赤いとうがらしを宝石の珊瑚珠にたとえ、世知辛い世の中で、口にすると涙が出るとうがらし（鷹狩とかけている？）であるが、庶民にとってかけがえのない秋の実りをもたらせてくれる有り難いとうがらしが歌われている狂歌と参勤交代図巻から、当時の世相の一端が垣間見られました。

などのとうがらしを題材とした狂歌から、住吉大社権禰宜 小出英詞は当時の住吉新家・安立町などの街道筋では、秋になると根引きとうがらしの束は魔除け、厄払い用といった縁起物に、とうがらし粉や実は料理・薬味用にと売られる土産物が軒を並べ、涙が出るほど辛い「鷹の爪」品種であったことを認めています。

家毎に 売出したる 唐からし

からき世わたる 術とこそしれ

名古屋 竜首園日々器

くふ人は 涙出けん

あはれなる

秋にみのいる とうがらしみせ

紀田辺 春隣

そして、江戸時代の住吉街道筋のとうがらし、瓢箪、糸瓜などを売っている土産屋の商いを支えていたのは、西成郡の新家、住吉郡の安立町および明治期において一大産地であった泉北郡など近隣の村々の農家であり、栽培に必要な種を供給していたのは安立町にいた数多くの種苗商人が関与していたのではないかと推定されます。

4. 「堺鷹の爪」の特徴

「堺鷹の爪」の立ち毛調査で、節ごとに花が咲き、実をつける節なり性を示し、約3cmと小さく、大変辛い、朱赤系の果実であることを確認しました(図3)。熊沢らの研究報告ほか関係資料から総合的に判断して、信州大学松島憲一博士の指摘のとおり、時代が遡った江戸時代の平賀源内の頃にあった本来の「鷹の爪」の節ごとに着果する特性が保持されていることから「鷹の爪」の純系種と判断され、「堺鷹の爪 純系品種」と表記することができました。

最後に、「中世の自治都市 堺は、南蛮貿易、鉄砲、茶の湯、宣教師との関りが深く、南蛮人へのおもてなしの食の調理に必要なトウガラシが堺港に伝わっていたと想像されます。我が国に最初にトウガラシが伝搬した種子島から地方への拡散とは別に、堺港にやってきたトウガラシは摂津および和泉の国ほか全国各地に次第に伝搬



図3. 節成り性を現す「堺鷹の爪」

していき、時間をかけながら地域の風土や和食と出会い、融合、改良、そして地域の食文化へと発展し、その美味しさなどが人気となり地域に定着していきます。一方、天下の台所、物流の中心であった商業の街大阪では、海の神さんが祀られている住吉大社の周辺街道筋の土産物屋店には、秋になると策に盛られた「鷹の爪」が台の上に並べられ、宝石の珊瑚珠のような赤い根引きトウガラシの束が軒に吊り下げられ、お詣りに来る人々に「五穀豊穰、商売繁盛、魔除け、厄除け、また料理に・薬味にいかがですか!」との売り声が巷に響きわたる賑やかな光景が毎年くり広げられ、・・・そして、当時のトウガラシのDNAが受け継がれた「なにわの伝統野菜」「堺鷹の爪」が再び住吉街道の賑わいの立役者になる」との夢物語りが浮かんだ。



図4. 「堺鷹の爪」の加工品とフレーム切手

住吉さんと太閤さん 第四回

——天下茶屋の伝説をめぐって(2)——

就実大学講師 竹内 洪介

住吉大社と豊臣秀吉——どちらも古くから大阪で愛され、親しみを込めてそれぞれ「住吉さん」「太閤さん」と呼ばれた存在です。ここでは、江戸時代に流布した秀吉の伝記的資料を中心に、そんな「住吉さんと太閤さん」の意外なかかわりを探ってみました。

私事で恐縮ですが、この春から所属が変わり、五年ぶりに本州に住むことになりました。新しい所属先は岡山県岡山市にある大学で、引越した当初は北海道とは異なる雪のない、暖かい環境に驚きました。

ところで岡山には、大変勝手ながら「かたき討ち」の印象を持っています。日本三大仇討ちと呼ばれるものの一つ「伊賀越えの仇討ち」(鍵屋の辻の決闘)は岡山藩士の話ですし、県内には「仇討の湯」として知られる湯郷温泉もあります(ただし、湯郷

温泉の「仇討の湯」は、女湯が男湯を覗ける位置にあり、普段男性に覗かれている女性男性を覗き返す、という意味の「仇討ち」です)。

今回取り上げる「かたき討ち」も岡山県が舞台の一つになっており、世に「天下茶屋の仇討ち」と呼ばれています。この仇討ちについて簡単に紹介すると、備前国(今の岡山県)の戦国大名・宇喜多秀家の家臣であった林玄蕃の子・重次郎と源三郎の兄弟が父のかたき・当麻三郎右衛門の仇討を

する筋立ての物語とまとめられます。敵の当麻が伊藤将監と名を変えて豊臣家の家臣・大野治長の家来となることや、兄・重次郎が返り討ちにあってしまうこと、残された弟・源三郎とその家来・鰐幸右衛門の主従関係等、ドラマチックな展開で江戸時代に変人気を博したことが知られています（なお、紛らわしいので、以後当麻三郎右衛門＝伊藤将監は原則「当麻三郎右衛門」の呼称で統一します）。

これを踏まえて今回話題にしたいのは、天下茶屋の仇討ちのラストシーンです。このラストシーンが豊臣家の住吉大社信仰に関わる点に注目し、「天下茶屋の仇討ち」イメージの展開をご紹介します。

既に述べた通り、天下茶屋の仇討ちにまつわる物語は江戸時代に変人気がありました。ただし、実はこの仇討ちは実在しなかったという説が現在のところ有力なようです（平出鏗二郎『敵討』および『日本説話伝説大事典』『天下茶屋の仇討』項）。では、いつからこの仇討ちの物語は伝わっていたのでしょうか。現在の研究では、享保二十年（一七三五）に大坂で初演された歌舞伎「住吉詣天下茶屋村」がこの仇討ちに関する

最も古い記録であり、延享五年（一七四八）に大坂で初演された歌舞伎「天下茶屋奴系図」がそれに次ぐとされています（藤沢毅「翻刻『摂州天下茶屋敵討』」）。ただし、この二作品の内容は現在わかっておらず、題名を確認することしかできません。

天下茶屋の仇討ちを記した物語において、今確認できる内容のうち最古のものは『摂州天下茶屋敵討』（一七六四年以前に成立）と呼ばれる作品です。この作品のすぐ後に成立した『天下茶屋敵討真伝記』（二七七二年頃成立）の大ヒットで陰に隠れている存在ですが、実のところ『摂州天下



↑天神ノ森天満宮の境内にある「天下茶屋あだ討ち供養塔」（写真は立札）。本来天満宮の南にある出口橋が仇討ちの舞台で、江戸時代後期に橋のたもとに供養塔が建立されたが、昭和33年に天満宮内に移された（天満宮境内は要撮影許可）。

『茶屋敵討』の内容は、現在主に伝わっている『天下茶屋敵討真伝記』に依拠した天下茶屋の仇討ちの物語とは少し異なっているところがあります(なお『摂州天下茶屋敵討』のあらましについて詳しくは藤沢毅『天下茶屋敵討真伝記』序論』に紹介されています。以下『摂州天下茶屋敵討』の解説はこの藤沢論文に依拠します。また、『天下茶屋敵討真伝記』中、今回考察する場面の梗概については、藤沢毅「『天下茶屋敵討真伝記』論(四)」に紹介されています)。

『摂州天下茶屋敵討』において現在とは異なっている場面の一つが、今回取り上げるラストシーンです。このラストシーンというのは言うまでもなく、林源三郎が鶴幸右衛門の助けを借りて当麻三郎右衛門を討つという、「仇討ち」成就の場面ですが、ここで注目したいのが場面設定です。現在天下茶屋の仇討ちを記念して建っている供養塔の立札には「秀頼が母淀君と共に大挙して住吉大社へ参拝の折」に仇討ちがなされた」と記されており、『天下茶屋敵討真伝記』以降の作品にもその通りに設定されています。また、『日本説話伝説大事典』には「豊臣秀頼の住吉社参の機会を利用して」とあり、やはり「秀頼の参拝」とリンクさせた仇討ちとして見なされているようです。

ところが、『摂州天下茶屋敵討』ではこの場面が淀君(秀吉の側室、秀頼の実母)の住吉参詣の途上と設定されており、源三郎と幸右衛門は豊臣秀頼からの使いと偽って三郎右衛門を呼び出し、敵討を果たすことになっているのです。なお、藤沢毅氏は『摂州天下茶屋敵討』が先行する歌舞伎二作品の筋書きを踏襲していた可能性を推測していますが、もしその推測が当たっているとすると、住吉詣天下茶屋村」の名が示す通り、この仇討ちは当初から「住吉詣」とリンクしていたものだと考えられるでしょう。

『摂州天下茶屋敵討』の時点では淀君ひとりが住吉大社に参詣する場面だったものが、『天下茶屋敵討真伝記』では秀頼も参詣に加わって描写されたということに関しては、この場面を華やかにする演出と考えられるかと思います。しかし今回ここで注目したいのは上記の点ではなく、『摂州天下茶屋敵討』が示すラストシーンのもっとも古い形が、淀君単独での参詣という形になっているということなのです。

『天下茶屋敵討真伝記』では、秀頼の重臣片桐且元が住吉大社造営を機に秀頼と淀君に住吉参詣を勧める場面があります。が、その通り秀頼は住吉大社に対して大



↑住吉大社の反橋（上）と石舞台（下）。

規模な社殿改修を行っており、現在でもその遺構として反橋・石桁・南門・東西楽所・石舞台を見ることが出来ます（『日本歴史地名大系』）。このうち住吉大社のシンボリック存在である反橋は淀君寄進と伝えられることもあります（ただし豊臣家寄進のもので現存するのは石桁のみです）。しかしながらいずれにせよ住吉大社の全体的な増築・寄進は秀頼によるものですし、秀頼が寄進した石舞台に至っては日本三舞台の一つに数えられるほど有名です（ち

なみに残る二つは四天王寺の石舞台と厳島神社の高舞台です）。大坂の役に先立つ慶長十八年五月には「此頃大坂にては右府秀頼公、しきりに住吉辺遊行のよし聞ゆ」と報告されてもいます（『台徳院殿御実記』）。つまり、住吉大社へ参詣する人物として思い当たるのは本来であれば淀君ではなく秀頼ではないかと思われるのです。だとすれば、なぜ秀頼ではなく、淀君が当初住吉大社を参詣する人物として選ばれたのでしょうか。

これについては秀頼が大坂城に幽閉状態にされていたという趣旨の歴史学的指摘も参考になりますが（曾根勇二『大坂の陣と豊臣秀頼』、『難波戦記』をはじめ、大坂の陣に取材する江戸時代の軍記・軍書には秀頼が戦場を巡見する描写も散見され、江戸時代に秀頼が幽閉状態だったというイメージで受け取られていたかどうかは慎重に検討する必要があります。その上で別の理由を求めるとするならば、これもあくまで想像の域を出るものではありませんが、そのヒントは仇討ちの舞台となる天下茶屋にあるように思われます。前号でも触れた天下茶屋の天神ノ森天満宮にある子安石には、秀吉が淀君懐妊の時に安産祈願を行ったという伝説が残っています。残念ながら天満宮周辺は度重なる戦火で被害を受け、結果的にこの伝説の記録はほぼ見つけられないのですが、子安石がこの天満宮の代表的存在だったことは『住吉名勝図会』（二七九四年刊）からも窺い知ることができますし、その天満宮の社殿は元禄十五年（二七〇二）頃に造営されたものであることもわかっています（『西成区史』）。すなわち天下茶屋の仇討ちに関する最古の作品と目される『住吉詣天下茶屋村』の上演時点で、既にこの天満宮は存在していたのです。また、

天神森天満宮から住吉大社に向かう途上にある、「奥の天神」として知られる生根神社（元住吉大社摂社）の本殿は淀君が寄進したものであり、明治期まで淀君手植えの楓が残っていたことがわかっており（『住吉区誌』）、淀君が住吉大社周辺の寺社にも寄進を行っていたのは間違いないようです。



↑ 現在天神ノ森天満宮境内にある子安石（左）と、天神ノ森天満宮（子安天満宮）を描いた『住吉名勝図会』（右）。囲み部分には子安石も描かれている（天満宮境内は要撮影許可）。

以上、『摂州天下茶屋敵討』の記事に大阪天満宮をはじめとする大坂の名所が頻出することから推して想像するならば、この子安石に関する伝説から来た連想のために、天下茶屋の仇討ちの舞台において、淀君のほうで秀頼よりも参詣の対象としてふさわしいと当初考えられたのではないのでしょうか。

秀頼と淀君の両名に住吉大社参詣をさせた『天下茶屋敵討真伝記』は、後続の演劇『敵討天下茶屋聚』と合わせて大ヒットし、

昭和頃までに同じ筋書きを受け継いだ多くの作品群が確認できるようになります。それだけではありません。天理図書館に未出版の草稿が残されている『絵本慶元難波軍記』（松川半山作・画）は大坂の陣を豊臣びいきの視点から記した幕末・明治最初期成立の絵本ですが、同書の初編巻四にはこの仇討ちの物語がそのまま掲載されています。

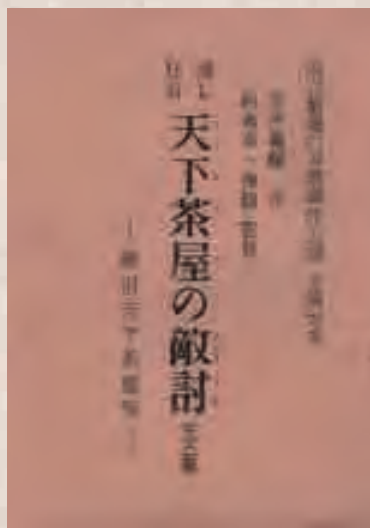
参考文献

- ・『徳川実紀』第一編（国史大系、吉川弘文館、一九八一年）
- ・『西成区史』（西成区市域編入四十周年記念事業委員会、一九六八年）
- ・『日本説話伝説大事典』（勉誠出版、二〇〇〇年。「天下茶屋の仇討」項は菊池庸介執筆）
- ・『日本歴史地名大系 大阪府の地名』（平凡社、一九八六年。「住吉大社」項参照）
- ・曾根勇二『大坂の陣と豊臣秀頼』（敗者の日本史13、吉川弘文館、二〇一三年）
- ・平出鏗二郎『敵討』（中公文庫、一九九〇年。初出一九〇九年）
- ・藤沢毅『天下茶屋敵討真伝記』序論―『摂州天下茶屋敵討』の検討（『江戸文学』第二十九号、二〇〇三年）
- ・藤沢毅『翻刻「摂州天下茶屋敵討」』（尾道大学芸術文化学部紀要）第三号、二〇〇四年
- ・藤沢毅『天下茶屋敵討真伝記』論（四）―敵討成就と大坂の陣（『鯉城往來』第九号、二〇〇六年）

付記 成稿にあたり、小出英詞氏に種々のご教示をいただきました。記して深謝申し上げます。

天下茶屋の仇討ちを扱った物語は、豊臣家の滅亡を扱う大坂の陣に関する物語にまで紛れ込んでいたのです。

以上、今回は天下茶屋の仇討ちのラストシーンに注目して、その伝承の展開をご紹介します。今回は視点を変えて、住吉大社にある「御文庫」の存在に注目し、「御文庫」と「太閤さん」の関係について考えてみたいと思います。



↑ 国立劇場で公演された『敵討天下茶屋聚』の台本。

住吉開帳 住吉の松の伝

住吉大社教学顧問

八木 意知男

はじめに

かつての摂津国海岸線上には、松樹が生い茂り緑をなし、浪の白木綿が遠く近くかかって展望された。そしてそこに朱塗の鳥居が配されて住吉社頭を顕わす典型的な景である。『万葉集』（岩波文庫所収本）に次の如く詠われているのは実景であろう。

角麻呂

清江乃木笑松原遠神我王之幸行処

すみの江の岸の松原遠つ神わが大君の
いでまじどころ

（巻三、二九五）

摂津作

住吉之岸之松根打曝緑来浪之音之清羅
すみのえの岸の松が根うちさらしよせ
来る波の音のさやけさ

（巻七、一一五九）

この場合、松樹は赤松（別名メマツ）が混生することもあるが、基本的には黒松（別名ヲマツ）で、いびつな形に曲がったりする。黒松の葉先はさわると赤松より硬く痛い。

そして、住吉明神に松樹は御神木であると信仰されて来た。これを顕著に示したのは『伊勢物語』（新潮日本古典集成所収本）第一一七段

むかし、帝、住吉に行幸し給ひけり。

我見ても久しくなりぬ住吉の

岸の姫松いく代へぬらむ

御神、現形し給ひて、

むつましと君はしらなみ瑞籬の

久しき世よりいはひそめてき

を、軸として考えられて来た。ここに語られる帝が何れであり、何年の事か、との疑問を中心としたもので、「我見ても」歌に片寄り気味であった。

かかる状況を経て、やがて「むつましと」

歌に対する理會も芽生えるが、そこには強い信仰的意味が求められることとなった。以下にふれるのはこの信仰の意味から発生するイメージの問題である。



一 住吉社御神木

摂津国の住吉大社の御神木と称される樹木は一種一本ではない。『摂津名所図会』も巻二「立聞神祠」条に

長岡山にあり。ゆゑに長岡社ともいふ。祭神いはしめし齋主神なり。これ経津主命の別号にして春日社とも称す。開口十三社長岡十五社、合はせて住吉二十八社の神木といふ事あり。『相生松』といふ書に曰く「二十八社の神木と申すは、栢かやへ七本、松へ七本、桂へ七本、楠くすへ七本、これすなはち神の正体なり。一の神殿の神木は松なり。二の神殿の神木は栢かやなり。

三の神殿の神木は桂なり。四の神殿の神木は楠くすなり。二十八社の中十五社の神はながをのきしすんぢのさと長岡岸住道里におはします」云々

とある如く、様々な木が御神木として祀られていたのである。そして是れは、『住吉松葉大記』が「当社七本植木之事」条に

或説云、松・楠・櫟・榎いんぎ・榲す（八木注、別名ビヤクシン）・桂・榿七本是也。是時も四七廿八。又松・楠・櫟・榎・榲、是時も四社に七本宛四七廿八社也。

今七姓之輩七本木を植て、四社社壇の神威を莊り奉る。松・楠・櫟・榎等也。委細に是を尋ぬべし。

一神殿者最初光を放て楠上に影向し給へり。三神殿者松梢に影向し給へり。七本是雖多当社には松を以て賞とせり。我朝に松の名所多しと云へども、当社を以て最一とす。松に五位を授けられたる事住吉を初とする。

とあるに対応する。故に、住吉社の御神木は多様であつたし、植樹して育成した木もあつたのである。例えば三韓より貢物として渡来した「橘樹」等もさような中に入る。しかし、御神木としての松に関しては別伝が存る。

二 御神木「松」の由来

『住吉名勝図会』巻五は、次の如き伝を載せている。

当社、松樹を神木とするは、昔時崇神天皇御夢に津の国住吉の浦と覺して、大空より暎々たる光輝照しぬと見玉ひて驚き覺ぬ。やかて人を住吉の浦^二やりて見せしめ玉ふ。三本の松樹生出たり。是を相生の松といふとかや。また平城天皇住吉に御幸し玉ふ御時の御製に

朕^{われ}見ても久しく成りぬ住よしの岸の
姫まつ幾代^{いくよ}経ぬらん
と詠^よしさせ玉へは、明神^{みやしん}天童^{てんどう}と現し玉
ひて

むつましと君^{きみ}はしらずや瑞籬^{みづかき}の久し
き代よりいわひそめてき

凡^{およそ}此瑞籬^{このみづかき}とは、崇神天皇大和の都瑞籬^{みづかき}の宮におわしましければ、かくハ詠^よし玉ふなり。此御神詠^{このごしんよ}にて住よしの松の名譽なる所と知るへし。

この伝、古今伝授書『古今和歌集灌頂口伝』（片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題（五）』所収本）の七ヶ大事中「第六、相生の松の事」条に見える



当社松樹を神木とする云々 『住吉名勝図会』

ものと同一である。つまり、人皇第十代崇神天皇の夢告を得給うたに依り住吉の地に若松三本が相生の状態で生えたことが確認された。「相生」は通常二本であるところ、住吉神は三神である故若松三本が相生の状態で生えたことが確認されたものである。住吉神は元は一つの三柱、若松も相生の三本、とてこれを住吉明神の御化生ととらえられてそれを

瑞籬（最も内側にある聖なる御垣）の内に斎い祀った。時に大和国磯城の瑞籬宮に都し治天下の崇神天皇の御代であつたが為「瑞籬の久しき代より」と御神詠第三・四句をなしている、と謂うのである。すなわち、住吉にては「千代見草（松）」は住吉神の御化生である故、御神そのものとなる。単に梢に影向（天降ること）したのではない。若松の姿となつて出現したのである。

三 『崇神天皇紀』と「神功皇后伝」

『古今和歌集灌頂口伝』を承け継ぐ『住吉名勝図会』の説であるが、ここには重大な問題が存在する。それは住吉明神の住吉地御鎮座の時期である。

上の崇神天皇に関わる譚が住吉地に明神が御出現の初発とするならば、神功皇后伝との間には大きな時間的隔たりが存することになる。

そもそも住吉明神が住吉地に御鎮座なさつてゐるのは、三韓征伐からの帰朝時、

「吾が和魂をば大津の淳中倉の長峽に居さしむべし。便ち困りて往来ふ船を看

さむ」とのたまふ。是に、神の教の随に鎮め坐ゑまつる。

（岩波文庫所収本『日本書紀』。以下『日本書紀』引用は同）

と、明神御自らの御神教に随つたものである。さすれば、住吉明神はこの時以前から同所に居られたが正式居住ではなかった。それを神功皇后に対し正式鎮座を望まれた、と理解すべきであろう。

実は、『崇神天皇紀』には神功皇后伝の予告とも言ふべき事共が含まれて居り、住吉神木はその一例である。

『崇神天皇紀』七年二月条には天皇が「災を致す所由を極めざらむ」とト問われたことを記す。その折に大物主神が夢に立ちて

「天皇、復またな愁うれへましそ。国の治らざるは、是これ吾が意しよぞ。若し吾が児こ大田田根子おほたねこを以て、吾を令祭まつりたまはば、立たに平たいぎなむ。亦また海外わたくしのほかの国有くにりて、自をづからにまうしな婦め伏ふひなむ」とのたまふ。

と教え給うたのである。ここにおける「愁へ」の中心は疫病流行であつたろうが傍線部分が『紀』には存在している。

大物主神が教え給うた傍線部分は当然父神素戔鳴神の中にあるもので、素神が遂れ給う

た時「其の子五十猛神を師^{ひき}ゐて、新羅国に降りました」（第三の一書）。そして素神は「韓郷^{から郷}の嶋には、是金銀有り。若使^{たとひ}吾が児の所御^{しち}す国に、浮宝^{うく}有らずは、未だ佳からじ」と述べた上で鬚髯^{ひげ}を抜き、木々となさった。その上で「杉及び橡樟、此の両の樹は、以て浮宝とすべし」と称^{こと}し給^{あづか}うた（第五の一書）のである。父神素戔鳴神から児神大物主神へ継承された神意というべきか。しかし、「浮宝^{うくたから}」を保有しなかった本朝ではどうにもならなかった。本朝に正式に「浮宝」が作造されるのは『崇神天皇紀』十七年七月朔日条詔に

船は天下の要用^{むづもの}なり。今、海^{わた}の辺^{ほとり}の民^{おほみ}、
船無^{ふね}きに由^よりて甚^{にへき}に歩運^{みちこひ}に苦^{くる}ぶ。其れ諸^{くに}國^{くに}
に令^{のりごと}して、船^{ふね}船^{ふね}を造らしめよ。

といわれ、同年十月には

始めて船舶を造る。

と見える。本朝が船舶を得たのである。

一方、神功皇后は『神功皇后摂政前紀』秋九月十日条に

諸^{みこ}國^{のり}に令^{みこ}して、船^{ふね}船^{ふね}を集^つへて兵甲^{へいこう}を練^ね
らふ。時^{とき}に軍卒^{いくさひしも}集^{あつ}ひ難^{がた}し。皇后^{のたま}の曰^{いは}は

く。「必ず神の心^{みこころ}ならむ」とのたまひて、
則^{たち}ち大三輪社を立てて、刀矛^{たちほこ}を奉^{たて}りたま
ふ。軍衆^{いくさひし}自^{みづか}づからに聚^{あつ}る。

とありて、造船し軍人を集めるのに「大三輪社」の力を請うている。皇后が意識なされたのは明らかに『崇神天皇紀』の内容と拝察すべきではなかるうか。とりも直さずそれは、素戔鳴尊が示し用意し給うた御事の実現に外ならない。

四 おわりに

素戔鳴尊が教え給い、播種なされた樹木の中に松は入っていない。松は「次に木の祖句^く句^く迺^の馳^ちを生む」（『神代紀』上）とある『木の祖』から生れたか。それであれば素神御誕生より古いことになる。つまり、素神より早くに生まれになった住吉大明神は、素神御誕生に先立^{さきだ}って生育^{そだ}っていた松樹を選んで現形したということである。

（京都女子大学名誉教授）

中世の事典に見える、

神功皇后関連記事

―『塵袋』・『壺囊抄』・『塵添壺囊抄』の場合―

畑 中 智 子

はじめに

神功皇后に関する事跡は、『古事記』・『日本書紀』・『風土記』に詳細で、新羅遠征、応神天皇の出産、麿坂王・押熊王おしくまみの討伐、摂政としての活動と、様々な言説が語られている。それらの説話には、住吉大神が深くかわり、加護を得た皇后の活躍が、生き生きと描かれる。しかしながら、その後、中世のある時期まで、各書において、その記述は限定的である。では、ある時期とはいつか。つとに指摘があるが、それは元寇、つまり文永・弘安の役である（久保田収「中世における神功皇后観」、『神功皇后』皇学館大学出版部、一九七二）。外敵という脅威を前に、人々は恐懼し、縋るべき神を見出そうとした。そこで、対外的な戦に勝利したという神功皇后は、他に比類なく、頼もしく、燦然と輝く存在であったのだろう。そのような思潮の中で、『八幡愚童訓』（正安三年（一一三〇））・嘉元二年（一一三〇）成立』を初め、『神功皇后縁起』（鎌倉中期以降成立）・『住吉の本地』（室町末期以降成立）などに新たな物語が語られるようになる。

本稿では、神功皇后に関する信仰や言説の変遷を知る一端として、中世期に作られた事典の記述を取り上げる。中でも『塵袋』ちりふくろ（良胤著力、文永十一年（一二七四）以後、弘安四年（一二八二）以前成立）・『壺囊抄』あいのうしやう（行誉著、

文安三年（一四四六）成立）・『塵添壺囊抄』じんてんあいのうしやう（天文元年（一五三二）成立）は、それぞれ先行する事典を意識して作られ、さまざまな書物や言説を引用し、多方面にわたる説明や考証がなされている。つまり、これらの書からは、当時の知識層の教養実態知れ、時代の空気を感じることができるのである。三書にみえる神功皇后に関する記事を抽出し、それらにどのような特徴があるのか、記事が中世の神功皇后信仰とどのように関わっているのかについて述べる。

なお、本文は『塵袋』（東洋文庫723・725、平凡社、二〇〇四）、『塵添壺囊抄・壺囊抄』（濱田敦・佐竹昭広・笹川祥生編、臨川書店、一九六八）を用い、適宜、句点を施した場合がある。文中の注は◇で示した。

一、『塵袋』・『壺囊抄』・『塵添壺囊抄』に収録の神功皇后関連記事

三書には、管見の限り、十例の神功皇后関連記事が見える。その項目は次の通り。標題については、前記各書に従う。

- ① 日本ヲ野馬台ト云フコトハリアルカ（『塵袋』巻一第五十三）

- ② 誉田天皇ヲ胎中天皇トモカク事（『塵袋』巻五第二）

- ③ ヲサナキモノヲヒザニノセテアエサゴノヒエサゴト云事（『塵袋』巻六第十四）

- ④ 僧ノカズヲ何口ト云事（『塵袋』巻七第六・『塵添壺囊抄』巻一第二十八）

- ⑤ 調美ニモノヲアユル「ト」云事（『塵袋』巻十第十九・『塵添壺囊抄』巻二第二）

⑥御弓ノ事〔『壺囊抄』巻一第六十二・『塵添壺囊抄』巻三第四十〕

⑦撰政関白ノ替リノ事〔『壺囊抄』巻二第七・『塵添壺囊抄』巻四第十五〕

⑧尾籠事〔『壺囊抄』巻七第二十一・『塵添壺囊抄』巻十一第八〕

⑨神道醜陋ヲ恥ジ給フ事〔『壺囊抄』巻八第十・『塵添壺囊抄』巻十二第十〕

⑩政道正シキヲ利利居士懺悔ト謂フ事〔『壺囊抄』巻九第四十二・『塵添壺囊抄』巻十四第十八〕

右によると、『塵袋』にのみ収録される記事が三例、『塵添壺囊抄』に収録される記事が二例、『壺囊抄』と『塵添壺囊抄』に収録される記事が五例である。『塵添壺囊抄』は、その序文に『壺囊抄』を基本に、『塵袋』の記事を追加するとの制作方針が示されており、神功皇后関連記事についても独自記事はない。では、次にそれぞれの内容を順に検討する。

二、内容の検討

①日本ヲ野馬台ト云フハコトハリアルカ〔『塵袋』巻一第五十三〕

日本ヲバヤマトノ国ト云フ。必ズ大和国一国ニカギラズ、和国ノ惣名也。（中略）又日本ヲバ倭奴国トモ云フ。扶桑国トモ云フ。倭面国トモ、東海姫氏ノ国トモ名ク。モロコシヨリハ東ニアタル故也。姫氏ト云ヘル心ハ、天照大神ハ女神ニシテヲハシマスユヘニ、姫氏トハ云フニコソ。野馬台ト云フフミハ、又神功皇后女帝之故^云。日本ノユクスエニナリユクベキヤウトオボシキ事ヲ云ヘルフミナ

レバ、クニノ名ヲ云フカ。宝誌和尚ト申ケル人ノカキ玉ヘル也。其ノ人ハ権化ノ高僧カ。

①は日本を「ヤマトノ国」と称することについて解説した項目。神功皇后の名は、傍線部にみえ、宝誌和尚が書いた「野馬台詩」という予言書に日本のことを「東海姫氏ノ国」とあることを指摘し、神功皇后が女帝である故か、との見解を示す。当該部分は、『新日本紀』〈卜部兼方著、正安三年（一三〇一）以前成立〉との類似が指摘されている（東洋文庫脚注）。『新日本紀』の本文は次の通り。

問。此国謂「東海女国」。又謂「東海姫氏国」。若有二其説一哉。

答。師説。梁時。宝志和尚識云。東海姫氏国者。倭国之名也。今案。天照大神始祖之陰神也。神功皇后又女主也。就「此等義」。或謂「女国」。或称「姫氏国」也。謂「東海」者。日本自「大唐」当「東方」之間。唐朝所「名」也。（国史大系）

両書は同一の内容で、神功皇后は天照大神と並列に語られている。このような記述は、『日本書紀』の他の注釈書にも見え、同時代に共通する認識であった（上巻真弓『中世神功皇后言説』、溪水社、二〇一七）。短い記述ではあるが、ここに神功皇后は、天照大神と肩を並べ、国の呼び名に関わるほどの人物（女帝）として存在している。

②誉田天皇ヲ胎中天皇トモカク事〔『塵袋』巻五第二二〕

ホンダノ御門、イマダ生レタマハザリシ時ヲ思テ胎中ト書タルヲモホムダトヨムハ義説也。何レノ御門カハ胎中ヨリ生レ給ハヌハアルベキナレドモ、殊ニ此ノ天皇コトニサ申ベキイハレアルニコ

ソ。菅田ノ天皇ト申スハ、今ノ八幡大菩薩ノ御事也。仲哀天皇ノ御子ニオハシマス。仲哀天皇ノ御時、御神託宣シ給テ、タカラノ国ヲトリ給ベキヨシヲツゲ申シ給フニ、サルベキ国ナシトテ用給ハザリケルヲ、御神ムツカラセ給ヒケリ。其ノ時キ菅田ノ天皇ハイマダ生レ給ハデ、神功皇后、此ノ天皇ヲハラミタテマツリ給ヒケルニ、御神、仲哀天皇ノ託宣ノ旨ヲ用ヒ給ハザル事ヲ恨ミ申給テ、此ノ御門ハ宝ノ国ヲ得給事モ叶マジクオハシケリ。腹ノ中ニイマス御子ノミゾ得給ベキト被レ仰ケリ。サテ程ナク御悩イデキテ仲哀天皇ハカクレサセ給ヒヌ。其ノ後神功皇后ホンダノ御門ヲハラミタテマツリナガラ、新羅等ヲバ打取り給ヒタリ。サレバ胎中ニオハシマシナガラ、御神モコノキミノミゾ得給フベシトノ給ヒシニアハセテ、皇后カクハラミタテマツリナガラ、国ヲ得給ヘレバ、是ヲホメタテマツリテ、胎中ノ御門ト申ス也。

②は「菅田天皇（応神天皇）」のことを「胎中天皇」とも書く理由について解説した項目。『日本書紀』仲哀天皇・神功皇后摂政前紀の、新羅征討に関する物語が要約されている。神功皇后については、応神天皇を懐妊したこと、懐妊しながらも、神託に従って出征し、新羅を討ち取ったことが書かれている（波線部）。ここに神功皇后は、応神天皇の強き母であり、懐妊をものともせず、戦を率いた女性と認識される。

③ヲサナキモノヲヒザニノセテアエサゴノヒエサゴト云事（『塵袋』巻六第十四）

（前略）

神功皇后ノ新羅ヲウチトリ給ヘル事ヲイフニハ、

二ノ説アリ。一二ハ、カノ国ノ王ヲソレヲナシテ降ヲコフ、ワレト手ヲシバリテ御船ノマヘニマイレリト云フ。一説ニハ、新羅ノ王ノ臍ヲハナチテハマノスナゴニウヅムト云ヘリ。サキノ説ヲ正説トス。コレニモ臍ノ字ヲアハタゴトヨマセタリ。

③は膝頭のことを「アエサゴ」と読むのは間違いで、「臍」の字を書き、「アハタゴ」と発音するのが正しいと説明する項目。その例として、神功皇后の新羅征討の記事が引用されている。この記事の出典は、『日本書紀』神功皇后摂政前紀の本編と一書で、当該箇所は次の通り。

新羅の王、遙に望りて以為へらく、非常の兵、將に己が国を滅さむとす。讐ぢて志失ひぬ。（中略）即ち素旆あげて自ら服ひぬ。素組して面縛る。図籍を封めて、王船の前に降す。（日本古典文学大系、以下同）

一に云はく、新羅の王を禽獲にして、海辺に詣りて、王の臍筋を抜きて、石の上に匍匐はしむ。俄ありて斬りて、沙の中に埋みつ。

両書の記述を比較すると、『塵袋』が②と同様に、『日本書紀』を要約していることが分かる。又、この記事からは、威風によって新羅の王を恐れさせ、屈服させた神功皇后の姿が見出される。

④僧ノカズヲ何口ト云事（『塵袋』巻七第六・『塵添塩裏抄』巻一第二十八）

（前略）

日向国古庾ノ郡ヘツネニハ児湯郡トカクニ吐濃峰ト云フミネアリ。神オハス。吐乃ノ大明神トゾ申スナル。昔シ、神功皇后新羅ヲウチ給シ時キ、

此ノ神ヲ請ジ給テ、御船ニノセ給テ、船ノ舳ヲ令レ護給ケルニ、新羅ヲウチトリテ帰り給テ後、踏馬ノ峰ト申ス所ニオハシテ、弓射給ヒケル時キ、土ノ中ヨリ黒キ物ノ頭サシ出ケルヲ、弓ノハズニテホリ出シ給ヒケレバ、男一人女一人ゾアリケル。其ヲ神人トシテ召シ仕ヒケリ。其ノ子孫、今ニ残レリ。是を頭黒ト言フ。始テホリ出サル、時キ、頭ノ黒クテサシ出タリケル故ニヤ。子孫ハヒロゴリケルガ、疫癘ニ死失テ、二人ニナリタリケリ。其ノコトヲ、カノ国ノ記ニ云ヘルニハ、日々死尽僅ニ残男女両口ト云ヘリ。是ハ国ノ守神人ヲカリツカヒテ、国役ニシタガハシムル故ニ、明神イカリヲナシ給テ、アシキ病ヲコリテシニケル也。(以下略)

④は人の数を「何口」とするのは、僧侶に限るか否かを解説した項目。神功皇后は、日向国一宮、都農神社(現・宮崎県児湯郡都農町川北)に関する説話に登場する。それによると、新羅征討の時、皇后は「吐濃峯」で神を勧請し、船の守護を得る。そして帰国後、「踏馬ノ峰」で弓を射かけた所、土の中から頭を差し出した「頭黒」という人々がいたので掘り出し、神人として仕えさせた、とある。この記述は「カノ国ノ記」(二重傍線)を出典とするが、詳細は不明。伴信友はこの記述を『筑紫風土記』逸文と採択している。『塵袋』著者の手元には各地の『風土記』があり、そこから例話を採録していたのだろう。この説話に描かれる神功皇后は、神の加護を得て、新羅征討を成功させた指導者である。

なお、この都農神社では、現在でも夏祭りに神功皇后のゆかりの、神輿渡御が行われている。但し、神社の起源について、社伝には、神武天皇東遷の折に大己

貴命を鎮祭されたことと伝え(『宮崎の地名』平凡社、一九九七)、『塵袋』の記述は見えない。

⑤調美ニモノヲアユル「ト」云事(『塵袋』巻十第十九・『塵添壺囊抄』巻二第二)

調美ニ物ヲアユルト云フト、人ノ物ニアユルト云フハ同ジ事カ。(中略)神功皇后、応神天皇ヲハラミタテマツリ給ケルトキ、新羅ヲウチ給ヒケリ。皇后輶ヲハキタマヒタルニヨテ、ムマレ給ヘル応神天皇ノ御ウデニソノシルシノツキ給ヘル事ヲ、日本記ニ云ヘル、既産之宋生腕上ニ其形如^レ輶。是肖^下皇太后為^二雄装^一之負輶^上云ヘリ。輶トハ、ユミイルトキヒデニツクルモノナリ。輶トモ轡トモ拾トモカク。今ノ世ニモ、ママキト云事ニハコレヲモチフ。(以下、略)

⑤は「あえる」という字について解説した項目。神功皇后の記述は、新羅征討の逸話で、皇后が輶をはいておられたので、胎内の応神天皇にも影響があり、出生時、腕の上に輶の形の肉(力瘤)があった、というもの。この記事は、『古事記』にもみえるが、『日本記ニ云ヘルニハ』とある通り、『日本書紀』応神天皇即位前紀を出典としている。書紀には「既に産まれませるときに、穴、腕の上に生ひたり。其の形輶^{はだた}の如し。是、皇太后の雄しき装したまひて輶を負きたまひへるに肖^あえたまへり。」とあり、『塵袋』と同文である。ここでも神功皇后は、懐妊しながらも武装して新羅征討に臨む、雄々しき女性として描かれている。

⑥御弓ノ事(『壺囊抄』巻一第六十二・『塵添壺囊抄』巻三第四十)

弓ヲ御タラシト云ハ何ノ故ゾ。神功皇后異国征討ノ御時多羅樹ノ真弓ヲ持給故ニ其ヨリシテ。御タラシトハ云也。則御弓ト書也。年中行事ニ兵部省ノ御弓ト書テランタラシト点シ侍リ。

⑥は弓を「たらし」ということを説明した項目。そして、その理由を、神功皇后が新羅征討の折に多羅樹の真弓を持っていらしたから、と述べる。加えて『年中行事』にも「兵部省の御弓」とあり、「ランタラシ」と振り仮名が付けられていることを指摘する。この記述は、記紀には見られず、『八幡愚童訓』（甲本）等によるものと考えられる。当該箇所は、光輝くような美貌の皇后が武装するという場面で「桑輦ノ御手ニ多羅樹ノ真弓。八目鐔ヲ持給フ（弓ヲ多羅樹云コトハ此多羅ヨリヲコレリ イ）（群書類従第一輯、以下同）」とある。この記述は後にも引き継がれ、『八幡宮御縁起』（室町中期成立）には「御手には多羅樹の真弓、八目のかふら矢を取りそへ給、弓を御たらしといふ事は、此多羅樹よりはしまれりとなん」（室町時代物語集、井上書房、一九六二）とある。又、本文中の『年中行事』は一条兼良（一四〇二～一四八二）著『年中行事大概』かと思われ、当該箇所は「又兵部省御弓奏をつとむ。御弓はじめに用させ給ふ御弓をたてまつるによて。御たらしの奏といへり。」（続群書類従第十輯上）とある。この項目では、『壺囊抄』が神功皇后に関する新たな言説を取り入れていることが認められる。又、この記述は、弓を手に異国征討に向う、勇猛な神功皇后の姿を彷彿とさせる。

⑦摂政関白ノ替リノ事（『壺囊抄』巻二第七・「塵添壺囊抄」巻四第十五）

摂政関白トハ何ナル事ゾ。替ル儀アル歟。同事歟。先ツ摂政ト云ハ天子二代テ政ヲ執ヲ云也。日本ニハ応神天皇櫛椶マシ／＼シカハ神功皇后天位ニ居給。然レトモ摂政ト申シ伝タリ。（以下、略）

⑦は摂政と関白について説明した項目。摂政は天皇に代って政事を行うこととし、神功皇后の例を示す。この記述では、皇后は「天位」についた、とする。しかし、記紀においては、あくまでも「皇后」と記述されている。つまり、「女帝」とするのは後世の解釈なのであって、例えば、『愚管抄』に「神功皇后、又開化ノ五世ノ女帝ハジマリテ」（日本古典文学大系）とある他、中世の様々な書には「女帝」との認識が示されている（前掲上篇論文）。『壺囊抄』においても、これら中世の認識が反映しているといえよう。この記述からは、天皇に代って政務を行い、実質的には女帝として君臨したという人物像を見て取ることができる。

⑧尾籠事（『壺囊抄』巻七第二十一・「塵添壺囊抄」巻十一第八）

同キ体ヲ尾籠ト云ハ。難ニ心得一詞也。何ナル謂ゾ。是ハ本朝ニ云始ル詞ト申セリ。慥ナル記録ヲ見侍ネ共。或説ニ応神天皇。海神ノ御末ナル故ニ。龍尾御座シテ。是ヲ隠サン為ニ装束裾ト云者ヲ作り始テ。是ヲ引キ彼ノ尾ヲ令隠サ給ケル也。然ルヲ出御ノ時。内侍未タ裾ノ内ニ有ヲ不知。障子ニ立テ籠奉ニケリ。其ノ時尾龍也ト仰セケルヨリ始レル詞也トナン。（中略）又此君取分テ。龍神ノ子孫ニ御セハ。御父仲哀天皇ハ。景行ノ御孫日本武尊ノ御子也。御母神功皇后ハ。開化天皇四世ノ御孫息長宿祢ノ御女也。仍テ息長姫尊ト申也。然ハ此

義難^レ思。若シ根源龍神ノ御孫世ヲ継給シカハ。応神天皇ナントマテハ。龍尾ノ御座シケルニヤ(以下、略)

⑧は「尾籠」という言葉を解説する項目。一説として、応神天皇が海神の末裔であり、龍尾があつたので、それを隠すために装束に「裾」を作つて、長く後ろにひき、尾を隠したという逸話を紹介している。そして、「両親が仲哀天皇と神功皇后であること、両親ともに天皇家の家系であることを指摘し、「根源龍神ノ御孫」とする。後半略した部分には、第五代神武天皇が龍神の子であると、記紀神話を用いての説明がある。「裾」の由来に関する説話について、その出典は現時点で不明である。しかし、父母ともに天皇の子孫であり、龍神の末裔であるということは、記紀の記述に明らかであり、神功皇后もまた海神の末裔と認識されていたと知れる。なお、神功皇后は、海の神である住吉大明神と深く関わることは周知の事柄で、『八幡愚童訓』・『八幡宮御縁起』等には、皇后の妹豊姫が竜宮に行き、早珠・満珠をもたらすという話題もある。このように、神功皇后と海の神は、さまざまな言説において密接に関わっている。ここに記された応神天皇の龍尾に関する話題も、中世の神功皇后に関する信仰の中で熟成され、語られた逸話の一つであつたのかもしれない。

⑨神道醜陋ヲ恥ジ給フ事(『壺囊抄』卷八第十・『塵添壺囊抄』卷十二第十)

(前略) 其証ヲ云ハ。昔シ神功皇后新羅ヲ攻給シ。御船ノ楫取ニハ。誰ヲカスベキト。住吉高良諏訪三嶋等ノ諸神評定アルニ。安曇磯良コソ。海底ニ久ク住テ。海ノ案内者ナレトテ。是ヲ召ル、ニ。

其顔ノ醜キ事ヲ恥テ。淨衣ノ袖ヲ面ニ覆テ参リケル也。常陸ノ鹿嶋大明神是也。又春日四所ノ其一也。筑紫ニテハ。鹿嶋明神ト云。大和ニテハ。春日大明神ト申也。

⑨は、神が醜い姿を恥ることを説明する項目。例話として神功皇后の新羅征討の逸話が引用されている。その話題は、新羅への船の楫取を誰にするかを神々が評定し、「安曇磯良」が海の案内者に適任とされたが、磯良は顔が醜いことを恥て、淨衣の袖で顔を覆つて参上した、というもの。この話題は、『八幡愚童訓』(甲本)に「住吉申サセ給ケルハ。御舟ハ出来ヌ。楫取ニハ誰ヲカサセ給ヘキト有シカハ。武内被^レ申ハ。何人ニテモ住吉御計可^レ有被^レ申シカハ。當時常陸国在^ニ海底^一。安曇磯良ト云人ヲ可^レ被^レ仰。」とあり、以降、磯良が長く海底に居た為、牡蠣殻などが顔について醜い姿であつたという話題、磯良を呼び寄せる為に神樂を行ったという話題、参上した時には袖を解き布で顔を覆つていた話題など、様々な逸話が展開する。これら逸話は、『八幡宮御縁起』や『八幡の本地』・『太平記』などにも広く収録されている。

⑩政道正シキヲ利利居士懺悔ト謂フ事(『壺囊抄』卷九第四十二・『塵添壺囊抄』卷十四第十八)

(前略) 然ニ日本ニ文書ノ渡ル事ハ。人皇第七代。孝靈天皇辛未ノ年。即位シ給。此卅六年丙午ニ当テ。周ノ世滅テ。秦ニ移ル。(中略)本朝ニ云習ハセルハ。神功皇后三韓ヲ夷給シヨリ。異朝ニ通シ。第十六代。応神ノ御世ヨリ。經史ノ学伝レリト云トモ。其書モ今ハナシ。(以下、略)

⑩は政道について書かれた項目で、当該箇所は、日

本に書物が渡ってきたことを記した部分である。中略した部分には、始皇帝が行った焚書坑儒について書かれており、孔子の書物は日本に残った、とある。神功皇后については、三韓を征伐したことで、異国に通じることとなり、応神天皇の時に經史学が伝わった、との説を載せる。この話題は『古事記』中つ巻に、次の記述がある。但し、『古事記』の記事に神功皇后の名は見えない。

（応神天皇の御世、引用者注）また、百済の国に、「もし賢し人あらば貢^{なげ}上^はれ」と科^{おと}せたまひき。かれ、命を受けて貢上れる人、名は和邇吉師、すなはち論語十卷・千字文一卷、併せて十あまり一卷を、この人に付けてすなはち貢進りき。（新潮日本古典集成）

右と同じ話題を載せる『神皇正統記』には「我国ニハ神功皇后三韓ヲタヒラゲ給シヨリ、異国ニ通ジ、応神ノ御代ヨリ經史ノ学ツタハレリトゾ申ナラハセル。」（日本古典文学大系）とあり、『壺囊抄』とほぼ同文である。但しこの記事では、神功皇后の名が明記されており、新羅征討が、我が国の文化を発達させた要因であると高く評価している。つまり、武だけでなく文の世界にも皇后が貢献した、との見解が見られるのである。

おわりに

以上、『塵袋』・『壺囊抄』・『塵添壺囊抄』に収録の、神功皇后関連記事を検討した。結果、『塵袋』の記述は『日本書紀』やその注釈書、『風土記』に基づいた逸話であり、古来から語られたものであった。それに対して、『壺囊抄』にはそれ以外の、『八幡愚童訓』等に見える、中

世期に新たに作られたとおぼしき逸話がとられていた。加えて、『塵添壺囊抄』は、独自の記述はないが、記事の採録状況を見ると、両書の記事を取り入れ、より広い逸話の収集がなされていると確認できた。又、三書の内容は、新羅征討の物語が特徴的であり、そこに描かれる神功皇后は、懷妊中でありながら、神の加護を得て、異国を攻め、敵を降伏させる雄々しき女性であった。この記事の偏重には、新羅征討が皇后の主な事跡であったことに加え、中世期の神功皇后信仰が関係していると推測できる。

例えば、『塵袋』には、「今ハ蒙古ニセメル。イト心ウキヨノスエノアリサマ也。」とあり、元寇という外圧の重々しい空気を感じながら執筆を行っていたと知れる。そのような時代にあつて、神功皇后は、「心ウキ」気分を一掃する、輝きを放つ存在ではなかったか。編者は神功皇后に希望を見出し、新羅征討の話題を、事典の例話として取り入れたのではあるまいか。そして、外敵の脅威が迫る中、神功皇后は人々に再発見され、新たな信仰を獲得していく。神功皇后へ期待は『八幡愚童訓』に見えるような新しい物語を生み出し、皇后に関する言説は膨張し、豊かになっていった。『塵袋』に続く『壺囊抄』には、これらの話題が収録された。例話として取り入れられた言説は、事典の記述という權威を得て、更に定着し、広がっていったことだろう。

本稿では、中世の事典という、ほんの一部の作品を取り上げたが、元寇の前後において、神功皇后信仰がいかなるものであったのか、その信仰が文学的営為にどのような影響を与えたのか、より広い分野に目配りをし考察することを、今後の課題としたい。

社務日誌抄

(令和三年一月から令和四年四月分まで)

令和三年(二〇二一年)

一月

一日 朔日祭・疫病流行鎮静祈願祭(※以下、各恒

例祭に併せて疫病流行鎮静祈願祭を執行)。

三日 明治祭・卯之日祭。観光庁域内連携事業 住吉

大社ツアー催行。大阪国学院神務実習生 梅垣

耕市郎氏受入。

四日 初辰祭。

五日 埴使川畑禰宜・倉智権禰宜・酒巻社務員奉仕

(奈良県橿原市 雲名梯川俣神社・畝火山口神

社)鈴木権禰宜見学。宮中献穀御箱奉納奉告

祭。近畿税理士会住吉支部ボランティア献血

境内使用。令和三年度大阪府保健衛生優良施

設「住吉大社吉祥殿宴会場」知事表彰。

六日 読売新聞 七五三準備掲載。

八日 五社秋季例祭。大阪市立清江小学校はぐくみ

ネット事業 岡禰宜講師、日下権禰宜助手。

九日 鹿目佳代子展 高井宮司観覧、高階権禰宜随同。

御文庫図書閲覧 小秋元三八人氏。神道青年会

ウェブ研修会 西角 星野 奥野権禰宜受講。

一〇日 市戎大国社月次祭。

十一日 大阪市立阪南中学校 職場体験学習五名受入

(翌日迄)。安立地区三親会(吉祥殿)高井宮司・

神武権宮司・川畑 逸見禰宜・武田 西角権禰
宜出席。神道青年会ウェブ研修会 星野 奥野
権禰宜受講。

一三日 大海神社月次祭。八坂神社 宮司 野村明義

氏就任挨拶来社 正式参拝。読売新聞夕刊

七五三詣掲載。

一四日 天神講獅子三百年記念式典(帝国ホテル)富澤

権宮司・万力禰宜出席。装道礼法きもの学院

七五三詣きもの救助隊奉仕。

一五日 十五日祭・七五三祝祭。

一七日 神社庁第九支部 神宮大麻暦頒布始奉告祭(住

吉大社)祭員 日下権禰宜奉仕。

一八日 十八日会(住吉大社)石清水八幡宮 宮司 田中

恆清氏、賀茂御祖神社 宮司 新木直人氏、長

田神社 宮司 脇延秀氏、北野天満宮 宮司 橘重

十九氏、生田神社 宮司 日置春文氏、西宮神

社 宮司 吉井良昭氏、多賀大社 宮司 片岡秀和

氏、湊川神社 宮司 垣田宗彦氏、春日大社 宮

司 花山院弘匡氏、大阪天満宮 宮司 寺井種治

氏、伏見稻荷大社 宮司 舟橋雅美氏、八坂神

社 宮司 野村明義氏、当社 宮司 高井道弘 参

会。大阪市立東粉浜小学校どんぐり拾い。初

詣警備会議。

一九日 大阪府玩具人形問屋協会連合会・大阪玩具人形住吉講 講元 熊本和浩氏以下五六名定例参拝、翫物商石燈籠建立二百六十年記念大会 神武権宮司・太田権禰宜出席。J A 大阪市技術部門農作物品評会「住吉大社賞」授与・農作物奉納式 会長 井波一咲氏以下六名参拝。大阪木材商住吉講 講長 大和秀樹氏以下一〇名定例参拝。モンゴル国文化大使 佐藤紀子氏来社。

二〇日 海上交通安全祈願祭。

二一日 (二財)住吉村常盤会村内安全祈願参拝・同評議員会 小出権禰宜出席。

二二日 本殿清掃。特殊神饌調製。宮司以下参籠。

二三日 新嘗祭(大祭)。責任役員 太田重彦氏・雪本泰永氏、御田講・蓬萊講 副講元 濱田孝氏・山本巖氏以下講員一九名参列。

二四日 兵庫県加西市北条住吉神社 宮司 林垂栄氏・総代長 黒田義隆氏以下一八名参拝。

二六日 初詣特別会議(住吉警察署)岡禰宜出席。熱田神宮全国巡廻公演(松下IMPビル)高井宮司観覧。積水ハウス主催オンラインセミナー 岡禰宜受講。

二七日 四恩学園七五三詣(大阪帝塚山RC)参拝。

二八日 浅沢社月次祭。

二九日 天王寺楽所雅亮会公演(フェスティバルホール)東野囀託奏楽、高井宮司観覧。

三〇日 定例清掃。職員会議。横貫芳子氏来社奉賛。

一日 朔日祭。大阪市立天下茶屋中学校五名 職場体験学習受入(翌日迄)。NHK大阪放送局 初詣「ゆったりもうで」報道 岡禰宜・河野権禰宜対応。

三日 住吉警察署協議会 岡禰宜出席。堺税務署 税務広報広聴官 橘研二氏・住吉税務署 総務課長 山岸隆美氏来社、確定申告広報協力依頼 高井宮司・岡禰宜面談。

五日 四天王寺樟蔭忌 東野囀託奏楽。

六日 神道青年会(大阪天満宮)日下 進藤 西角 星野 鈴木 奥野権禰宜出席。

七日 北海道小樽市住吉神社 宮司 星野昭雄氏参拝。「御田の生物多様性 意見交換会」立教大学特任教授 河口眞理子氏・大阪市立自然史博物館 学芸員 長谷川匡弘氏ほか七名、岡禰宜・高階 小出権禰宜出席。

九日 卯之日祭。大歳社楽太鼓修理奉納奉告祭 森克良氏 舟田良子氏参列。

一〇日 初辰祭。市戎大国社月次祭。

一二日 大阪市教育委員会「大阪の歴史再発見」見学会 高階権禰宜案内。椎原崇氏来社奉賛。

一二日 毎日放送 正月特番「初詣まいり隊 関西・開運 スポット十八選」収録。

一三日 大海神社月次祭。玉岡かおる氏「帆船」出版記念祝賀会(神戸ポートピアホテル)高井宮司出席祝辞。椎原崇氏来社奉賛。

一五日 祭。社報「住吉っさん」第三七号発行。

オリックス・パファローズ、パシフィックリーグ優勝祝賀 高井宮司・中野権禰宜訪問(三月一三日当社必勝祈願)。

一六日 斎館修理奉賛奉告祭 網干輝雄氏以下七名参拝。

一七日 埼玉県さいたま市岩槻区仲町住吉神社 総代眞中昭夫氏参拝。J・COM「角田信朗のおっさんぽ」収録、武田権禰宜出演。奈良テレビ「なになに」収録、日下権禰宜出演。

二〇日 海上交通安全祈願祭。大鳥大社 宮司 水無瀬忠俊氏来社。

二二日 港住吉神社 社号標柱竣功祭・除幕式、奉納者奥野武久氏・高井宮司・神武権宮司・岡田禰宜・名村権禰宜参列。当社所蔵品文化財予備調査、大阪市文化財保護課 鈴木慎一氏。住吉税務署 総務課長 山岸隆美氏来社、確定申告広報協力依頼。

二三日 在大阪モンゴル国総領事館来社参拝。

二四日 関西テレビ「報道ランナー」兵動大樹の今昔さんぽ「小出権禰宜出演。

二六日 煤払式。自衛消防訓練。本殿清掃。禊行事。BS一二三団餅つき。読売新聞 朝日新聞 毎日新聞 大阪日日新聞 奈良新聞、正月授与品作業各取材。

二七日 源氏物語「関谷澤標図」屏風複製陶板顕彰碑奉納奉告祭・除幕式、奉納者 エース証券(株)取締役社長 出口義展氏・同社員会 園田高志氏以

下三一名参列。原図所蔵者 静嘉堂文庫美術館 館長代理学芸員 浦木賢治氏、制作者 大塚オミ 陶業(株)代表取締役社長 大杉栄嗣氏参列。読売新聞 朝日新聞 毎日新聞 大阪日日新聞 奈良新聞、初詣関連各報道。

二八日 浅沢社月次祭。

三一日 師走大祓式。除夜祭。宮司以下神職参籠、年越。

令和四年(二〇二三年)

一月

一日 若水の儀。元旦祭。初詣(※正月三日が日参拝約九二万人、昨年比一四三・八%、例年比三九・三%の出入)。境内出店不可。神賑行事なし。初詣特別分課実施。正月本殿祈祷預かり祈祷開始。新年神楽各奉仕。りそな銀行グループ、南海ビルサービス協力会社等、各清掃奉仕(三日迄)。関西テレビ 中国新唐人TV 読売新聞 毎日新聞 日本経済新聞 大阪日日新聞 産経新聞 朝日新聞 初詣報道。閉門一八時(五日迄)。

二日 初卯祭。琴古流尺八美風会奉納演奏。大阪府赤十字血液センター「神社 de 献血」(三日迄)。

三日 元始祭。初辰祭。産経新聞 毎日新聞 読売新聞 大阪日日新聞 初詣各報道。

四日 踏歌神事。敷布講新年参拝。年末年始関係者御礼 神武権宮司 岡禰宜回礼。

七日 白馬神事・昭和天皇陵遥拝式、神馬白雪号 杉

谷昌保氏 川上正太郎氏奉仕、神馬講 講元 河村博史氏以下講員参列。新年献詠祭短歌選者 会 佐沢邦子氏 安田純生氏 香川ヒサ氏選考。神稜講新年参拝。御神酒講新年参拝。

八日 四本宮並船玉社防火放水（一〇日迄）。

九日 市戎大國社宵宮祭（宵えびす）、市戎大國講 講元 北正彰氏・夏越女保存会会長 長田淳子氏・住吉御崎講 講元 友澤洋一氏・住吉踊保存後援会 会長 長谷川八重子氏・福娘七名等各講員奉仕（翌日迄）。

一〇日 市戎大國社例祭（本えびす）、前日同断。

一日 港住吉神社新年祭。

二日 若宮八幡宮例祭（湯立神事）、宮原幸夫氏（佐備神社宮司・関西雅楽松風会）以下神楽奉仕。御結鎮神事、奉射神事弓十番（住吉大社御結鎮祭大的式）大阪府弓道連盟 会長 中野英夫氏以下二六名奉仕。宿院頓宮新年祭。大海神社月次祭。

四日 四本宮並船玉社防火放水実施。住吉税務署広報協力 高井宮司「税」揮毫。

十五日祭・新年献詠祭（産経新聞社後援・末廣堂協賛）、天位「青空に手を振るように窓を拭く背伸びして拭く孫のお手伝い」米谷茂氏、地位「ふる里の土付き甘藷を箱に詰め帰省かなわぬ娘らに贈りぬ」仲谷清治氏、人位「知・忠・信と我らはらから名付けらる八犬伝を好みし父に」石川知子氏。古札焼納式（とんど）。

初辰まいり（二の辰）。

一八日 十八日会 高井宮司出席（八坂神社）星野権禰宜 随行。産経新聞夕刊「街行く路面電車」掲載。

一九日 住吉公園事業会議 小出権禰宜出席。

二〇日 海上交通安全祈願祭。

二三日 消防訓練 大阪市住吉消防署・自衛消防隊協力。御文庫閲覧 富山短期大学 客員教授 木村 郁子氏来社。

二六日 大阪船主会海上安全祈願祭、大阪船主会 会長 小野晃彦氏以下参列。（学）浪速学院施設竣工記念催事 神武権宮司参列 高階権禰宜随行。

二七日 今主社例祭。

大阪府、まん延防止等重点措置を要請（二月二〇日迄）。

二八日 浅沢社月次祭。（学）皇學館理事評議員会 神武権宮司代参。

三一日 定例清掃。職員会議。

二月

一日 朔日祭。立聞社例祭。海士子社例祭。当社所

蔵品文化財調査、大阪市文化財保護課 課長 鈴木慎一氏。

三日 節分祭。港住吉神社節分祭。

七日 卯之日祭。

八日 初辰祭。

一〇日 市戎大國社月次祭。宮司以下参籠。

一一日 紀元祭・檀原神宮遥拝式。

一三日 大海神社月次祭。吉祥殿ブライダルフェア。

一五日 十五日祭。

一八日 住吉祭祀図研究会 小出権禰宜出席。

大阪府、まん延防止等重点措置の延長(三月六日迄)。

一九日 市戎大國講會議 講元 北正彰氏・川畑 逸見禰宜・中川権禰宜出席。

二〇日 海上交通安全祈願祭。ジェイアール京都伊勢丹チャリテイ「芸能人と文化人の作品展」高井宮司観覧(宮司揮毫出品)。大阪市観光プログラムあじわい大阪催行。大阪府赤十字血液センター「神社de献血」催行。

二二日 宮司以下参籠。

二三日 天長祭。

二五日 初詣自主警備総括会議 岡禰宜・河野権禰宜出席。

二六日 御祓講獅子会議 万力禰宜出席。

二八日 浅沢社月次祭。神社庁神宮大麻暦頒布終了奉告祭 日下 福山権禰宜奉仕。職員会議。

三月

一日 朔日祭。オリックス野球クラブ・大阪シティドーム安全祈願参拝。

二日 清風高等学校卒業証書授与式 高井宮司参列、高階権禰宜随行。神社庁 庁長 藤江正謹氏来社。

三日 卯之日祭。

四日 初辰祭。立浪部屋(日本相撲協会)寄宿(四月三日迄)

大阪府、まん延防止等重点措置の再延長(三月二一日迄)。

五日 侍者社例祭。出雲大神宮 宮司 岩田昌憲氏来社。

六日 土俵祭 降神之儀、立浪部屋参列。

七日 住吉大社責任役員会・常任総代会(書面回議)。神社庁例祭習礼 岡禰宜参加。西岩部屋 港住吉神社寄宿(三月二九日迄)。

八日 埴使、武田 日下権禰宜・坂田社務員奉仕(奈良県橿原市 雲名梯川俣神社・畝火山口神社)奥野権禰宜見学。水木しげる先生生誕百周年記念顕彰碑除幕式(住吉名勝保存会) 高井宮司参列、小出権禰宜奉仕(南海粉浜駅前)。

九日 草薙会近畿支部役員会 万力禰宜・附柴権禰宜出席。シニア自然大学校講座 小出権禰宜講師。

一〇日 市戎大國社月次祭。神社庁例祭 岡禰宜奉仕。

一二日 すみよし歴史案内人の会 小出権禰宜講師。毎日放送「魔法のレストラン」境内撮影。

一三日 大海神社月次祭。

一五日 十五日祭。

一六日 本殿清掃。特殊神饌調製。宮司以下参籠。神社庁祭儀部講習会 岡禰宜参加。

一七日 神種頒賜祭。祈年祭、責任役員 太田重彦氏以下総代・御田講 講元 山本英夫氏以下講員。JA大阪市代表理事組合長 菱井由一氏参列。松苗神事献詠俳句選者会 古賀しづれ氏 森田純一郎氏 小杉伸一路氏 楠本義雄氏選考。神

社庁春季慰霊祭習礼 岡禰宜参加。

一八日 神社庁春季慰霊祭 岡禰宜奉仕。

一九日 千度講(旧中在家東之町)参拝。初任神職研修(神社庁)西角 星野 奥野 鈴木権禰宜受講(二七日迄)。

二〇日 海上交通安全祈願祭。市戎大國講会合 講元

北正彰氏以下講員・川畑 逸見禰宜・中川権禰宜出席。

二一日 皇靈殿遙拜式。招魂社春季例祭。神馬塚 高井宮司参拝、倉智権禰宜随行。千度講(東粉浜・安立・安立四丁目北・安立一丁目中)参拝。

大阪府、まん延防止等重点措置の解除(一月二七日より実施)。

二四日 大阪市文化財審議会(大阪市文化財保護課)当社所蔵品一時貸出(四月七日迄) 神武権宮司・小出 中川権禰宜立会。(学)浪速学院理事會評議員會 神武権宮司出席。新年度新規採用神職研修(三二日迄)。

二五日 (学)皇學館評議員會 高井宮司出席。

二六日 新年度新規採用神樂女研修(三一日迄)。観光資源活用事業會議 小出権禰宜出席。

二七日 土俵祭 昇神之儀、立浪部屋参列。

二八日 浅沢社月次祭。アサヒ飲料(株)「三ツ矢の日」参拝。関西北前船研究交流セミナー実行委員會(兵庫県高砂市)神武権宮司出席。

二九日 神社庁理事選任臨時協議會 川畑禰宜出席。常任總代 網干輝雄氏通夜式(浄國寺) 高井宮司・神武権宮司・逸見禰宜・高階権禰宜・吉田主

事参列。

三〇日 常任總代 網干輝雄氏告別式、高井宮司・神武権宮司・高階権禰宜・石橋主事参列。

三一日 定例清掃。辞令交付。職員會議。

四月

一日 朔日祭。五社春季例祭。職員辞令・新採用小

山手公平 神人に任ず。同 古澤良々・大久保

麻耶・三枝小夏 神樂女見習を命ず。兵庫県

加西市北条住吉神社出張、神武権宮司・岡禰宜・星野権禰宜参籠。

二日 兵庫県加西市北条住吉神社 例祭・節句祭九百年奉祝祭 住吉大社獻幣使 神武権宮司・岡禰宜・星野権禰宜奉仕。

三日 松苗神事・神武天皇陵遙拜式、松苗献木 岩根正尚氏、後援者 岸の姫松講 講元 大賀信幸氏以下講員、献詠俳句選者 古賀しづれ氏 森田純一郎氏 小杉伸一路氏、入選者参列。天位「類なき日本の四季苗木植う」平敦子氏、地位「しづかなる土に鋤入れ松植うる」仲谷清治氏、人位「この地球救ふ一歩や苗木植う」柏原憲治氏。

五日 宿院頓宮桜祭。住吉警察署 署長 木下剛氏以下就任挨拶来社。

六日 正印殿祭。和宗總本山 四天王寺 副管長 瀧藤尊淳氏・同執事長 南谷恵敬氏就任挨拶来社。

七日 大阪市文化財審議会(大阪市文化財保護課)当社所蔵品返還、神武権宮司・小出 星野権禰

宜立会。

八日 卯之日祭。兵庫県加西市北条住吉神社 卯之花記念植樹、岡禰宜参列。御田講事務局会議高階権禰宜出席。住吉公園事業会議 小出権禰宜出席。

九日 初辰祭。種貸社例祭。

一〇日 港住吉神社楠玉稻荷社例祭。市戎大国社月次祭。松原市柴籬神社宮司 安松昌志氏以下総代会参拝。

一二日 防災管理講習 庄司権禰宜受講。新入社員安全衛生教育講習会 小山手神人受講。

一三日 大海神社月次祭。

一四日 鉾社例祭。高野山真言宗総本山金剛峯寺 高井宮司訪問、管長 葛西光義大僧正御挨拶、同宗河内宗務支所 愛染院住職 野口真龍氏同行、逸見禰宜・太田権禰宜随行。

一五日 十五日祭。おとしぼし社春季例祭。神稜講定例参拝。住吉踊保存後援会会合 神武権宮司・万力禰宜・中野宮寄 滝沢 星野権禰宜・小山手神人出席。住吉警察署交通課「高齢者事故死ゼロ」啓発活動 境内使用。

一八日 十八日会 高井宮司出席(春日大社)星野権禰宜随行。

一九日 御田講事務局会議 高階 倉智権禰宜出席。松田友子氏来社奉賛。

二〇日 海上交通安全祈願祭。島津忠久公誕生記念祭。大阪市立美術館 館長 内藤栄氏・同学芸課長

弓野隆之氏就任挨拶来社。住吉祭礼図研究会 小出権禰宜出席。茶道稽古(八木社中)再開。御田レンゲ摘み どんぐり保育園。

二二日 靖國神社永代神樂祭 高井宮司参列。四天王寺聖霊会舞楽 東野囀託奉奏。御田レンゲ摘み こぐま保育園。

二三日 大阪護国神社 宮司 藤江正鎮氏来社。中野紀久雄氏褒章祝賀会 高井宮司・神武権宮司・川畑 岡禰宜出席。住吉祭太鼓会会合 万力禰宜・中川 奥野権禰宜出席。

二五日 東京都港区乃木神社 宮司 加藤司郎氏来社。日本曆学会総会(近江神宮)中川権禰宜出席。

二六日 ユナイテッド・レリジョンズ・イニシアティブ(URI)タヒル・シャルマ氏来社。

二七日 神社庁教化委員会 川畑禰宜出席。

二八日 浅沢社月次祭。職員定期健康診断。宮司以下参籠。

二九日 昭和祭。エース証券(株)代表取締役社長 出口義展氏参拝奉賛。大阪能楽大連吟 齋藤伸輔氏以下四〇名参拝。

三〇日 定例清掃。皇學館大学創立百四十周年再興六十周年記念式典 神武権宮司参列。

四天王寺 瀧藤副管長様 南谷執事長様
 ご就任のご挨拶に
 当社を表敬訪問

令和4年4月6日、和宗総本山 四天王寺より瀧藤尊淳副管長様、南谷恵敬執事長様がご就任挨拶のため表敬訪問をいただきました。

昨年、聖徳太子千四百年御聖忌慶讃大法会にと
 もなう記念事業も結願を迎えられました。今回、
 新役員のご就任につき親交を重ねられるべく、当
 社の神前を拝礼の後、高井宮司と神武権宮司と懇
 談され、現代社会や疫病禍における諸問題につい
 て意見交換をいたしました。



書籍紹介

玉岡かおる

ほしん

『帆船——北前船を馳せた男・
 工業松右衛門——』

第41回新田次郎文学賞受賞



新潮社 2,200 円

播州高砂の漁師から身を起こし、豪胆な船乗りとして
 名を揚げ、時代を先取りする海商となった松右衛門。
 やがて千石船の弱点だった帆の改良に自ら取り組み、
 苦難の末に画期的な「松右衛門帆」を完成させて、江
 戸海運に一大革命をもたらすこととなる。あの高田屋
 嘉兵衛が憧れた、知られざる快男児を活写する長編歴
 史小説。

江戸時代の海運を支えた廻船業。その背景には
 播州高砂出身の松右衛門による帆布の発明があり
 ました。大型で破れにくい帆布の製法は惜しげも
 なく全国に広められ、全国の海運に革命をもたら
 しました。今回、玉岡かおる先生によって、その
 一代記として『帆船——北前船を馳せた男・工業松
 右衛門——』が出版されました。

令和3年12月13日、神戸ポートピアホテルの大輪
 田の間にて出版記念祝賀会が開催されました。先生の
 ご招待により当社の高井宮司も出席、祝辞を仰せつ
 かりました。

兵庫県加西市北条町

住吉神社節句祭九百年奉祝祭

加西市北条住吉神社

宮司 林垂栄



加西市北条「住吉神社鶏合せ」（市指定無形民俗文化財）

兵庫県加西市に鎮座する当住吉神社は、『住吉大社神代記』に記載される播磨国賀茂郡住吉酒見社であり、当社由緒記にも御祭神である住吉大神が摂津住吉から参られたとの記述もあることから、分霊社の一社としてご神縁をいただいて参りました。去る平成二十九年四月春季例祭（節句祭り）並創建千三百年奉祝祭に際し、高井宮司様自らお越しをいただき奉幣祭詞をご奏上賜りましたことも、まだつい先日 of 事の様に感じております。

今般、当社古記録に「保安三年（一一二二）三月三日鶏合始之是不私儀式也」とあり、これが当社例祭（節句祭り）の初見であることから、本年は節句祭り九百年の佳節を迎えました。

コロナ禍による様々な制限もある中、今回四月二日に春季例祭並節句祭り九百年奉祝祭を斎行するにあたり、神武権宮司様にお運びいただき、前回同様にご奉仕賜りましたことは、住吉大神様のご神威と住吉大社様の温かいご配慮のお陰と心より厚く御礼申し上げます。お陰をもちまして神輿の渡御はもちろんのこと龍王舞・鶏合せ等の神事や十二台の化粧屋台の奉納など全ての神事行事を無事執り



「住吉神社龍王舞」(県指定無形民俗文化財)

納めることが出来ました。

また、この節句祭り九百年を記念し、住吉大社境内にて自生した「卯の花」を賜りたくお願い申し上げましたところ、ご快諾の上、去る四月八日岡禰宜様の手により当社本殿へとお納めいただき、報告祭をご奉仕申し上げました。その後社務所前に植え付け、現在葉の緑も鮮やかに根付きつつあります。

今後、私共もしっかりと地に根を張り、今回賜りましたご縁を大切にしながら、住吉大神様のご神威の高揚、更には氏子崇敬者の益々の弥栄を祈念して参りたいと存じます。

住吉祭 旧堺中宿地車の発見

かつての住吉祭では、地車でんぐるが各講組織（今でいう職業組合組織）にて運行され、大変な賑わいを見せていたことが当時の記録でうかがい知ることが出来ます。

しかし、明治29年（1896）に起こった地車騒動にて、鍛冶屋組の地車と出島組の船地車が互いに道を譲らず大喧嘩に発展し最終的に2名の方が亡くなる大惨事になってしまいました。

その際には、当時の全国紙の新聞に載るような大きな事件となり、長く続いた堺の祭礼も以後中断となり、日露戦争後に解禁されるまで、堺の町から地車をはじめ様々な練物ねりもの（布団太鼓、鉦など）が姿を消してしまいました。

住吉祭で出されていた地車たちは、その大半が売却されたり廃棄されたりして、現在では堺旧市内には1台も地車は存在していません。他地域に売却された中には元の所属が確認されているもの、所属不明だが堺から購入したと伝わるもの

が少数ながら現存しています。

今回報告する地車は、長年、堺型地車であることは知られていました。が、所属を示す手がかりが確認出来ず、それを断定するには至りませんでした。

その地車の現在の所有者は徳島県の日和佐八幡神社の氏子で、寺込てらこめという地域が所有する地車として長年の間秋祭りに曳き出されて来ました。今回は、まず日和佐の地に堺の地車が渡った経緯から説明いたします。

寺込の地車は堺から直接購入した物ではなく、日和佐から北にある阿南市の村が明治末年頃に堺から購入しています。その後いかなる理由からか隣村に売却され、大正6年に日和佐の地に売却されて来たと説明を受けました。

ここで一つ明らかになりましたのが、明治29年の地車騒動の10数年後に売却されているということです。これによって、元の所有講組織である中宿なかつくはいつの日か地車が出せるであ

ろうと、その後もしばらく保存してきたものと推測されます。しかし、地車の復活は警察より許可が下りませんでした。また、堺の街では現在も活躍しているふとん太鼓へと、数々の地車講が変換している真っ最中でした。事実、明治末年から大正の間に、堺の中宿は「中宿濱」と改称して開口神社にふとん太鼓を奉納するようになりました。

この中宿とは、堺旧市内の中之町と宿院町の地区のことで、開口神社の八朔祭にふとん太鼓を奉納していた講組織であったことが山中啓祐己氏の著書『堺布団太鼓盛衰記』に紹介されています。しかし、中宿に地車があり、住吉祭に出していたことは、数々の文献では確認され



日和佐八幡神社・寺込地区所有地車
※旧堺中宿（中之町・宿院町）地車



赤外線調査による墨書判明 「亥七月 中宿」

ず、今回が初めての発見となりました。

地車の在った正確な住所については現在不明ですが、後継の中宿漬ふとん太鼓の記録から見れば、現在の堺利晶の杜から西側一帯であったと考察されます。この地域はかつての住吉大社宿院頓宮から見ると、正面鳥居の眼前であり頓宮のお膝元に位置づけされる地域でした。

今回、日和佐寺込地車が旧中宿地車と判明したのは、現在の科学技術の進歩によるものです。墨書きが薄まってしまえば消えている状態であったため、これまでは元の所有が判明しませんでした。

消えてしまっていた墨書きを蘇らせたのは赤外線による技術でした。撮影された写真には「亥七月 中宿」の文字が浮かび上がり、中宿地車と判明することになりました。

地車の装飾品においても住吉祭を連想させるものはいくつか確認されています。地車の大屋根小屋根の垂木には菊紋の金具が、屋根の上部にある箱棟といわれる部位には大きな巴紋が取り付けられています。

そして、後面の後挺子穴（うしろてこあな）の上部金具には中心に宝珠があり、左右から波が宝珠に引き寄せられてゆく様子があらわれています。

これは海幸彦山幸彦の神話や、神功皇后の三韓遠征に登

場する「潮干珠」を模していると考えられます。伝承では住吉大社宿院頓宮の飯匙堀に納められたと伝えられています。よって、中宿が頓宮の眼前の地域であることから、潮干珠を装飾金具に用いたと推測されます。

また、地車全体の姿見も現存する住吉祭の旧地車との類似点もいくつか確認されます。おそらくは同時代（江戸後期から明治初期）に作成されて活躍した地車であろうと思われます。

最後に、今回の調査において日和佐八幡神社の永本宮司さま、寺込地車の浅田さまには、突然の申し出にも関わらず大変親切ご丁寧な御協力をいただき、感謝の念に堪えません。誠にありがとうございました。

日和佐の地には、江戸時代に堺から伝わったふとん太鼓（別名ちようさ）も存在しており、古来より堺と関係が深い地域でもあります。今回報告いたしました地車以外にも、今後様々な事が判明するかもしれません。コロナ禍の終息が一日も早く到来し、住吉祭も日和佐八幡神社の秋祭りも笑顔で開催される日を祈念し、本稿の結びといたします。

住吉大社宿院頓宮総代

小田前 重久



日和佐八幡神社 例大祭
〒779-2304 徳島県海部郡美波町日和佐 浦 369



背面の後挺子穴の上部金具
中心の宝珠は潮干珠を象ったものか



屋根の箱棟には巴紋を掲げる

源氏物語顕彰碑の寄進建立

俵屋宗達 国宝「関谷潞標図屏風」複製陶板

奉納 エース証券株式会社

原図所蔵 静嘉堂文庫美術館

陶板制作 大塚オーミ陶業株式会社

令和3年12月27日 奉納奉告祭・除幕式

住吉大社の正面参道に新たな顕彰碑が寄進されました。静嘉堂文庫美術館が所蔵する国宝・俵屋宗達筆「関谷潞標図屏風」の「潞標図」を陶板複製した屏風型の碑で、光源氏の住吉詣の場面が鮮やかに描かれています。

本碑は、エース証券株式会社（令和4年5月1日、東海東京証券㈱に合併）の創業108年記念事業としてご寄進いただきました。また、原図を所蔵される静嘉堂文庫美術館には、格別なるご好意により複製のご許可をいただきました。今回の制作では大塚オーミ陶業株式会社のご協力により、やきもの技術の特性を生かした陶板絵画として、原寸大の複製を実現していただきました。

令和3年12月27日、奉納者であるエース証券㈱取締役社長 出口義展様（現・東海東京証券㈱副社長）、同社員会 園田高志様をはじめ31名様のご参列のもと除幕式を執行しました。また、原図ご所蔵の静嘉堂文庫美術館より館長ご代理で学芸員の浦木賢治様、そして、ご制作の大塚オーミ陶業㈱代表取締役社長の大杉栄嗣様にもご参列たまわりました。

絵画には反橋と鳥居の場面が描かれますが、場面に描かれた現地に設置されたのも趣のあることで、後世まで語り継がれる名所となることを期待しています。

寄進取次 禰宜 万力一雅



令和四年（二〇二二）

下半期の祭事暦

7月7日（木）	10時	星宮例祭	ほしのみやれいさい	末社星宮
7月18日（月）	10時	汐汲行事	しほみぎぎょうじ	大阪湾
7月21日（木）	16時	神輿洗神事	かみこしあびせんじんじ	正面参道
7月30日（土）	16時	斯主社例祭	このめしやれいさい	末社斯主社
7月31日（日）	10時	宵宮祭	よぐみやさい	第一本宮
	16時	遷霊祭	せんれいさい	第一本宮
	（引き続き）	例大祭（大祭）	れいだいさい（だいてい）	第一本宮
8月1日（月）	10時	夏越祓神事	なごしのがしらせんじんじ	第一本宮
	16時	朔日祭	さくじつさい	五月殿前
	13時	発輿祭	はつよさい	第一本宮
	15時45分	頓宮祭	とんぐみやさい	第一本宮
	16時	荒和大祓神事	あらにこのおほらえしんじんじ	宿院頓宮
	17時15分	還輿祭	えんよさい	飯匙堀
8月2日（火）	7時	人形流神事	ひながたながしんじんじ	第一本宮
8月7日（日）	10時	薄墨社例祭	うすすみしやれいさい	大阪湾
9月1日（木）	10時	楯社例祭	たてがしやれいさい	末社薄墨社
9月9日（金）	10時	志賀神社例祭	しがじんじやれいさい	末社楯社
9月10日（土）	18時	観月祭	かんげつさい	撰社志賀神社
9月19日（月）	10時	児安社例祭	こやすしやれいさい	第一本宮
9月23日（金）	10時	皇霊殿遷拜式	こうれいでんせんはいしき	末社児安社
10月9日（日）	11時	招魂社秋季例祭	しょうこんしやしゅうきれいさい	神楽殿
10月13日（木）	10時	大蔵社例祭	おほぞうしやれいさい	末社招魂社
10月15日（土）	11時	大海神社例祭	おほかいじんじやれいさい	末社大蔵社
10月16日（日）	10時	おいとしばし社秋季例祭	おいとしばししやしゅうきれいさい	撰社大海神社
10月17日（月）	10時	龍社例祭	りゅうがしやれいさい	おいとしばし社
	10時	御田刈祭・神宮神嘗祭遷拜式	みたかりさい じんぐうかんめさい じんぐうしんじやうはいしき	末社龍社
	（引き続き）	宝之市神事	たからいちのしんじ	五月殿
10月19日（水）	10時	后土社例祭	こうしやれいさい	第一本宮
10月21日（金）	10時	船玉神社例祭	ふなたまじんじやれいさい	末社后土社
11月3日（木）	9時	明治祭（中祭）	めいしやさい（なかつさい）	撰社船玉神社
11月15日（火）	10時	五社秋季例祭	ごしやしゅうきれいさい	第一本宮
11月23日（水）	10時	七五三祝祭	しちごさんいっさい	末社五社
12月26日（月）	15時	新嘗祭（大祭）	にいなめさい（だいてい）	第一本宮
12月31日（土）	17時	大祓式	おほらえしき	第一本宮
	（引き続き）	除夜祭	じゆやさい	四本宮
				境内
				第一本宮

※祭礼の時間や神賑行事・奉納行事は変更する場合があります。



元祖 さつま焼（登録商標）

さつま焼はその昔
住吉の物産であつたさつま芋を
形どつたなにわの味、
昔からの銘菓であります。
十勝小豆を精製した
淡泊な味のこしあんを、
秘伝の皮で包み、
心を込めて、一本一本竹串に刺して
焼き上げております。

幾星霜の老舗の味を、ご賞味ください。
摂津一之宮 住吉大社御用達御神饌調進処

御菓子司
株式会社
東廣堂

本店 大阪市住吉区東粉浜三丁目一ノ二一四
TEL 〇六（六六七）四四二八
〇六（六六七）八八三〇
FAX 〇六（六六七）三〇一九

毎週火曜定休日

第38号の表紙 源氏物語顕彰碑

奉納エース証券株式会社（令和3年12月27日）。原因は静嘉堂文庫美術館所蔵の俵屋宗達筆「関谷澤標図屏風」（国宝）より「澤標図」を陶板複製した屏風型の顕彰碑。 ※本誌41頁に紹介記事あり

日本の伝統
花嫁の正統。

 住吉大社吉祥殿

Tel 06-6675-3591 fax 06-6675-3311

URL <http://www.sumiyoshitaisha.jp>

〒558-0045 大阪市住吉区住吉 2-9-89
(水曜定休日)

令和4年(2022) 7月1日発行(年2回発行)

発行人 高井道弘

発行

住吉大社

住所

大阪市住吉区住吉2丁目9番89号

Tel

06・6672・0753

印刷 真生印刷株式会社